

会話における発話順番を維持する韻律的实践の考察

周 匯声（京都大学大学院生）

1. はじめに

我々がコミュニケーションを行う際、話し手の交替は繰り返される。「言葉を発する機会」が会話参加者の間に配分される。会話分析の研究において、サックスら (Sacks, Schegloff & Jefferson, 1974) は「順番交替のシステム」を提案し、会話の順番交替は実は極めて秩序立っていることを示した。現在の話し手以外の者が順番を取って話し始めてもよい場所のことを、順番の移行適切場 (transition relevance place, 以下 TRP) と言う。本研究が焦点を当てている「発話順番を維持する韻律的实践」は、TRP の位置で観察されるプラクティスである。日常会話において、発話が TRP に至ったとしても、話者交替が発生しないことがある。TRP の位置で「沈黙」が観察される事例もあれば、先行発話の話し手が話し続ける事例もある。本研究は後者、つまり話し手が TRP の位置で特定の韻律的特徴を利用し、自身の発話順番を維持する实践の解明に取り組む。こうした発話順番を維持する韻律的实践が果たす相互行為上の働きを実証的に解明する。

2. 研究背景：駆け抜け (rush-through) とその音声的特徴

TRP の付近で自身の発話順番を拡張するやり方の中に、「駆け抜け (rush-through)」という实践がある。「駆け抜け (rush-through)」とは、発話順番の完結可能点に近い地点で、話し手がより早いスピードで発話を産出する、あるいは吸気をやめるなどの方法を使って、「複数の TCU からなる発話順番 (multi-unit turn)」を作るプラクティスである (Schegloff, 1982)。「駆け抜け」の音声構造を分析する研究もされており (Walker, 2010)、以下のような特徴が観察されている。

- (1) 速度：最初の TCU の完了可能点の直前の発話は、その前の部分の約 2 倍の速度で産出される。
- (2) ピッチ：最初の TCU は完成したイントネーション・フレーズのピッチ特性を持つ。
- (3) 発音の連続性：最初の TCU と 2 番目の TCU の間には音声上の中断がない。

本稿が用いる日本語の会話断片の中の発話順番を維持する实践にも、上記の音声的特徴が観察されている。会話参加者はいかにして韻律的特徴を利用し、複数の TCU からなる発話順番を構築するのかについて、事例

(1) で見よう。19 行目の「釣りの人たち」の部分から「そういうわけでもないの」の部分への移行に注目する。まず観察できるのは、「釣りの人たち」の部分は TCU の他の部分より速いスピードで産出されたことである。同時に、最後の音節 /t̞ei/ はしっかり発音されず、母音の /i/ の無声化が観察される。最初の TCU の末尾の /t̞ei/ と新しい TCU の冒頭の /s/ の間には観察可能なギャップもない。智香ここで「駆け抜け」を遂行したと言える。図 1 は、音声分析ソフトウェア Praat で作成したこの部分のスペクトログラムとピッチ曲線である。

このように、会話参加者が韻律的特徴を利用し、TCU の完了可能点を TRP だと見なされないようにすることができる。結果的には、話者交替が回避され、発話者が複数の TCU からなる発話順番を構築し、後続の発話スペースを確保した。

3. 分析

会話参加者は「駆け抜け」を用いることで、何を達成し、その場の相互行為をどのように方向づけているか。どのような相互行為上の課題を対処するために、話者交替を回避し、同じ順番内の問題解消に向けて工夫をしたのか。会話分析の方法論

(Schegloff, 2007) を用いて考察を行うことで、これらの間に答えていく。本稿は『日本語日常会話コーパス』(小磯他, 2023) から収集した会話データを用いて分析を行う。本稿でのデータの書き起こし

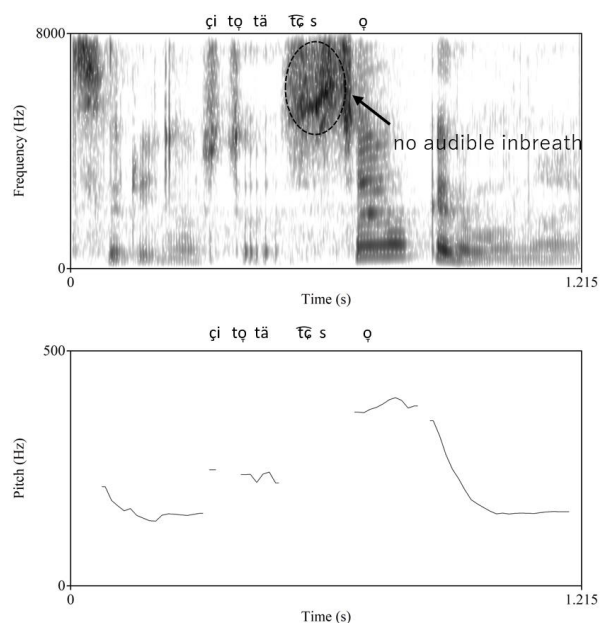


図1 事例 (1) 「駆け抜け」のスペクトログラムとピッチ曲線

は、会話分析で通常使われるジェフアーソンシステムを用いる (Jefferson, 2004)。

「駆け抜け」が埋め込まれる活動を記述するには、その「駆け抜け」を含む発話がどのような連鎖環境

(Schegloff, 2007) の中のどのような位置に置かれているのかを観察する必要がある。ここからは、連鎖の第一位置で観察される「駆け抜け」と、連鎖の第二位置で観察される「駆け抜け」を記述していく。

3.1 連鎖の第一位置における「駆け抜け」

会話参加者は連鎖の第一位置で「駆け抜け」を実行することによって、選好されない反応を先制的に回避することができる。まずは事例 (1) を見てみよう。会話参加者の中、指田は釣りの経験者である。01 行目から 10 行目までのやり取りにおいて、指田は自身の経験から魚を釣った後の処理法について語る。紀子と智香は要所要所で、語られた内容は問題なく理解できたサインを産出し (03, 04, 08, 09 行目)、「継続を促す要素 (continuer)」

(Schegloff, 1982) を利用して語りを促す。ここで注目するのは、指田は 10 行目において、「魚を釣ったその場で血抜きをすると、魚が美味しくなる」という主張を示した。智香は 18 行目で指

田の主張に対して「確認要求」を行った。Küttner & Ehmer (2023) によれば、「確認要求」は以下の行為を遂行する装置として利用可能である¹：(1) 質問をすること、(2) (受け手の主張あるいは計画と関連する) 新しい命題内容 (propositional content) を提示すること。「確認要求」は他の参加者に対する挑戦を含意する装置として利用可能である。智香は 18 行目で「その場で焼いて食べるのが好きなんですよ」という「確認要求」を行っていると同時に、「釣った魚の処理法」について新しい主張を提示した。この発話は指田の 10 行目の主張に対する挑戦として理解されることが可能である。18 行目の発話が「好きなんですよ」の直後に TCU の完了可能点に至り、指田からの反応がなかった。この後の智香の発話が、「不同意を先制的に回避する」という特徴を帯びる。

「駆け抜け」周辺のやりとりを考察しよう。僅かな沈黙の後、智香は 18 行目の TCU に対する付加要素「釣りの人たち」を産出し、自身の主張を一度調整する。18 行目の発話は指田の経験に対する挑戦として理解可能であり、「釣りの人たち」を追加産出することによって、「焼いて食べるのが好きなんですよ」の理解のされ方を調整した。具体的に言うと、「焼いて食べるのが好きなんですよ」という発話を「指田の経験に対する挑戦」ではなく、「一般論としての釣り人の好みに対する個人的な理解」として組み立てる。しかし、付加要素の追加だけでは不十分かのように、その直後に「駆け抜け」が観察される。「釣りの人たち」という発話が TCU の完了可能点に至る直前に、智香は「駆け抜け」を利用し、指田が自己選択を通じて発話順番を獲得できる前に新しい TCU を産出した。その理由は、「釣りの人たち」を付け足すことで、18 行目の発話に含まれる「挑戦」の含意は部分的に解消されたが、18 行目が遂行している「確認要求」に対する選好される/選好されない応答の様相はまだ変えられていないからである。指田は 10 行目での主張が変わっていない以上、「釣りの人たち」の後に話者交替が起きたら、「不同意」という選好されない反応が産出される可能性が高い。そのような可能性を先制的に回避する手段として、「駆け抜け」が存在し、智香に利用される。新しく追加された TCU において、智香は否定疑問文を用いて 18 行目の発話の極性を反転させる。「焼いて食べるのが好きなんですよ」

事例 (1) : [T023_002 03:41~04:05]

- 01 指田: 釣り:もそうなんだよ>あの<
02 指田: 釣った時[に:]すぐその場]でえらんとこ
03 紀子: [うん]
04 智香: [う::ん]
05 智香: [はい[はい]はいはいはいはい.]
06 紀子: [° あ::°]
07 指田: [切ってち:出しちゃうん]だよね.
08 紀子: う[::ん]
09 智香: [なる]ほどね]
10 指田: [そう]するとおい]しく (0.3) なるから.
11 紀子: え:じゃあ何,釣りってそう- (i-)
12 紀子: そういうこともやんなきゃいけないから結構
13 (0.2)
14 紀子: 忙しいよね.
15 指田: うん::そんな忙しくな-[びゅっと]やればさ=
16 紀子: [° あそう °]
17 指田: =[ナイフで]
18 智香: [>あれでしょでも<]な-その場で (0.3) 焼いて食べるのが好きなんですよ(.)
19 智香:→ >釣りの人たち<=そういうわけでもないの¿
20 指田: [うん::あん:]やっぱり鯛とかはさ (.) [一晩:]
21 智香: [持って帰ってくるの¿]
22 紀子: [うん.]
23 紀子: そうそう[置かさないと:おいしくないんだよ
24 指田: [寝かさないとおいしくない=
25 拓司: [あ:置いたほうが
26 指田: =甘みが出ないんだよ

¹ Küttner & Ehmer (2023) はこのような「何らかの行為を遂行する能力」のことを interactional affordance と呼んでいる。

に対する不同意は、同意という選好される反応として産出できるようになった。「釣りの人たち」の直後の位置で、不同意が産出されることは回避された。「駆け抜け」を通じて、潜在的な選好されない反応の産出を対処する事例と言える。

次の事例(2)においても、連鎖の第一位置の「駆け抜け」は潜在的な選好されない反応の産出を回避するための手段として利用される。これは会話参加者たちが「クラブ」という話題について雑談している場面である。松山がとあるクラブの常連客であり、酒見は07行目で松山に向けて「クラブに行く女の子」についての「評価」を産出する。しかしその直後は、松山は評価に対する同意を産出しなかった。08行目の沈黙が「不同意を暗示する要素 (pre-disagreement)」(Schegloff, 2007)として理解可能である。実際の不同意の産出を回避する工夫が、09と10行目の発話から観察できる。酒見はまず「どっちかっていう

事例(2): [T018_014 31:25~31:42]

- 01 酒見: ディスコなんか行くの? () ちゃん。
 02 松山: いろん::いやいろんな人いますね[ほんとに。
 03 酒見: [へ:::
 04 酒見妻: [ふ:::ん
 05 (1.2)
 06 松山: あっ面白い[な:と思い°ながら°。
 07 酒見:→ [ああいうとこ行く女の子ってギャル風じゃないの。
 08 (0.4)
 09 酒見:→ °>どっちかっていうと<°=
 10 酒見:→ =そうでもないの。
 11 (0.5)
 12 酒見: ちっちゃらんぼらんしてるような
 13 酒見: そう[でもない_]
 14 松山: [huhhuh[ちゃらん(h)ぼらん(h) [してるような]=
 15 酒見妻: [う:::ん]
 16 酒見: [そうでもない_]
 17 松山: =tch!まあそんなことゆったら僕も[ちゃらんぼらんしてますけどね].hh

と」という07行目の発話に対する付加要素を産出し、評価を一度ダウングレードする。さらに、09行目の直後に「駆け抜け」を行い、新しいTCUを産出する。07行目で「ああいうとこ行く女の子ってギャル風じゃないの」という言い方をしたのに対して、10行目では「そうでもないの」という否定疑問文を用いて極性を反転させる。もともとの評価に対する不同意が、10行目の否定疑問文が産出された環境において、「同意」という選好される反応として産出できるようになった。実際のところ、松山が10行目の直後の位置で同意を産出しなかったが、酒見の「駆け抜け」と極性反転の操作によって、選好される反応が産出されやすい環境が作り上げられた。

事例(2)において、極性反転という操作自体がいくつかの場所で観察されることができる(10, 13, 16行目)。しかし、韻律的特徴を利用し、TCUの完了可能点をTRPにしない工夫は見られるのが10行目の発話だけである。他話者の自己選択ができるタイミングの前に、「駆け抜け」で順番を維持することによって、同じ順番内の行為調節が可能になる。言い換えれば、極性反転を使って先行TCUを再構築するというプラクティスは、確かにもともとのTCUに対する選好される/選好されない反応を変えることができるが、選好されない反応を先制的に回避するためには、「駆け抜け」という手続きが重要である。

ここまでは、連鎖の第一位置の「駆け抜け」がいかにして「選好されない反応を先制的に回避する」という相互行為上の課題に対処する時に利用されるのかを記述してきた。次節では連鎖の第二位置で観察される「駆け抜け」の事例を検討することで、この現象について考察を深めていきたい。

3.2 連鎖の第二位置における「駆け抜け」

連鎖の第二位置の「駆け抜け」は、後続連鎖を発話者にとって好ましくない方向に拡張させないための手段として利用される。事例(3)を見てみよう。事例(3)では、昌美と父はガーランドを作るための生地をハサミで切っている。布用のハサミと生地カット用の機械がないため、二人はかなり苦戦している。06行目で、父は生地の形にこだわる必要性について昌美に質問を投げる。父の質問に対して、昌美は飾り作りに詳しい知り合いの意見を引用し、応答を産出する。09行目で、父は07行目の「この形」について「確認要求」を行う。

ここで10行目の昌美の「確認」とその直後の「駆け抜け」に注目しよう。「駆け抜け」によって追加産出された新しいTCUのなか、「かもしれない」という確信の度合いを弱めるモダリティ表現が使われた。10行目の発話を、話者交替が起る前に調整する理由はどこから生じたのかを考察する時、06と07行目の発話をもう一度見る必要がある。06行目の発話は否定疑問文の形式で組み立てられているが、単なる昌美に対する「質問/情報要求」として理解するのが不十分である。直前のやり取りから分かることは、適切な道具がないため、生地を切る作業の難しさは話題として取り上げられる。このような環境で産出された「これにこだわらなくてもいいんじゃないの」は、「愚痴」としても理解可能である。知り合いの意見を引用し、「この形が一番縫いやすい」という応答を提示したが、三角形はなぜ縫いやすいのかについての理由説明をまた産出していない。無論、06行目の発話は隣接対の第1成分として、三角形にこだわる理由を強く求めつつあるわけではないが、「愚痴」の産出も考慮に入れると、06行目で開始された連鎖は10行目の「三角」の直後で閉じられるとは考

えにくい。10行目の発話に対する確認要求（たとえば「四角じゃダメなの？」）や情報要求（たとえば「どうして四角にしないの？」）は生じる可能性があり、昌美の11行目における行動から分かることは、彼女はまさにそれらの可能性を先読みして回避している。「駆け抜け」を利用し、父が自己選択を通じて発話順番を獲得できる前に「四角でもいいのかもしれない」を産出することで、進行中の連鎖を（三角にこだわる理由についての）「情報要求-情報提供」あるいは「確認要求-確認」の方向に拡張させないことができる。つまり、連鎖の第二位置の「駆け抜け」は、後続連鎖を発話者にとって好ましくない方向に拡張させないための手段として利用される。

4. まとめ

本稿は、会話参加者は韻律的特徴を利用し「駆け抜け」を実行することで、どのような相互行為上の課題に対処しているのかについて考察した。分析の結果、連鎖の第一位置での「駆け抜け」は、相手からの選好されない反応を先制的に回避する時に利用される。連鎖の第二位置での「駆け抜け」は、後続連鎖を発話者にとって好ましくない方向に拡張させない時に利用される。このように見ると、韻律操作は、相互行為における潜在的な問題に対処するための重要な資源であることがより明確になるだろう。

謝辞 本研究は京都大学人間・環境学研究科「学術越境プログラム」の助成を受けたものです。本研究の分析は、会話分析研究会の皆様、並びに京都大学横森研究室関係者の皆様にアドバイスをいただきました。ここに深く感謝いたします。

参考文献

- Jefferson, G. (2004). Glossary of transcript symbols with an introduction, In Gene H. Lerner (Eds.), *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. pp. 13-31, John Benjamins.
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香 (2023). 日本語日常会話コーパス設計と特徴, 国立国語研究所論集, 24, 153-168.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest sysmatics for the organization of turn-taking for conversation. *Language* 50(4), 696-735.
- Schegloff, E. A. (1982). Discourse as an interactional achievement: Some uses of 'uh huh' and other things that come between sentences. *Analyzing Discourse: Text and Talk*. 71-93.
- Schegloff, E. A. (2007). *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge University Press.
- Küttner, U., & Ehmer, O. (2023). Affordances and Actions: Requests for Confirmation as Devices for Implementing Challenging and Other Disagreement-Implicative Actions, *Contrastive Pragmatics*. 1-45.
- Walker, G. (2010). The phonetic constitution of a turn-holding practice: Rush-throughs in English talk-in-interaction. In D. Barth-Weingarten, E. Reber & M. Selting (Eds.) *Prosody in interaction*. pp. 51-72. John Benjamins.

事例 (3) : [K005_020 19:51~20:34]

- 01 昌美: [あの 機械でが]ーってできるところじゃないとまとめて。
 02 辰雄: [これ,これな]
 03 辰雄: う::ん
 04 (0.3)
 05 昌美: ほん[との-
 06 辰雄: [ほんとこれにこだわんなくてもいんじゃないの?
 07 昌美: もこの形が: 一番縫いやすいつってあの二:-新潟の人がゆわれたの。
 08 (0.9)
 09 辰雄: こ三角の?こういう[の?
 10 昌美:→ [うん三角=
 11 昌美:→ =ま四角でもいいのかもしれないけど。
 12 (2.3)
 13 昌美: で一枚二枚のほうはね?
 14 (0.4)
 15 昌美: 一枚のほうが:ケ-ス-あのほら
 16 昌美: >布が取れるし<と思ったんだけど
 17 (1.3)
 18 昌美: あの布がいっぱいほらあつ(.)° これダメだ。°